古代史に遊ぼう

第 49 回　―尾張紀行―　尾張氏は海人で物部

尾張とは愛知県西半分の旧国名であり、この地に古代から勢力を張っていたのが尾張氏である。古代史に華やかに登場するスターは尾張連草香で、その娘目子媛はヲホド王（後の継体天皇）の越前における最初の妃となり、産んだ２男児は短い期間であったが、安閑天皇と宣化天皇として即位した。継体天皇は日本海と琵琶湖、および周辺の諸河川の水運を掌握、河内の馬飼をも勢力下におき、その結果「近畿水回廊」を政治権力の基盤としたが、尾張氏もまた木曽・長良・揖斐の三川および伊勢湾の水運を握ることで力を保持しており、息長氏らとともに尾張氏は継体政権を支える有力な氏族であった。

海人は大きく二つに分かれ、船を操り航海する職能を司るものと潜り・釣り・網などで漁労を行う海人がいた。海部と云う名を持つ郡は尾張の他には紀伊、阿波、豊後、隠岐（海士）がある。当時の伊勢湾の海岸線は今よりも北にあり、現在の愛知県海部郡は木曽川の河口部からその上流の東側である。大海人皇子（後の天武天皇）の乳母は、尾張郡海部郷の首長尾張大海の娘で、大海人は幼少の頃ここで育てられた。彼は壬申の乱で吉野を脱出し伊勢へと抜け出た際、尾張氏の一族の助けを受けた。乳兄弟の尾張大隅は傘下の鍛冶伊福部を派遣して､大海人の本拠美濃での刀槍の生産に協力し、皇子は美濃・尾張の兵を主力として、不破の関を越えて瀬田の唐橋を目指し、勝敗を決する戦いを挑んだのである。

海部氏系図は丹後半島の付け根、天橋立の近くの籠（この）神社の神主家に伝わる系図である。和気氏系図とともに現存する日本最古の系図とされ､国宝に指定されている。籠神社の祭神は「彦火明命（ひこほあかりのみこと)」、またの名を「天火明命（あめのほあかりのみこと)」､「天照国照彦火明命」である。系図の始祖「彦火明命」は天祖より２枚の神鏡を授かって、冠島に降臨し、その子孫は丹波の国造となり、その後は籠神社の祝部となり現在の宮司に至るまで､直系が世襲してきたことを系図は伝えている。その奥宮である真名井神社は古代より豊受大神が祀られていたという神域で、豊受大神はこの地から伊勢に移されたことから､籠神社は元伊勢とも呼ばれている。祭神には「天照国照彦天火明奇玉饒速日命」と云う別名もあり、天の磐船に乗って河内国に降臨したと記紀などに記されている。降臨に際し、「虚空みつ日本（やまと）の国」と云ったのが「やまと」の語源であるという。饒速日命（にぎはやし）の息子が可美真手命（うましまじ・石切劔箭神社祭神・物部氏の祖）や高倉下命（たかくらじ・高倉結神子神社・弥彦神社祭神）である。

尾張氏の祖神は海部氏と同じく「天火明命」であり、航海・漁労人である海人が日本海側から太平洋側に移り住み､やがて人口が増加し、尾張氏となって伊勢湾一帯の水運と漁業の支配を確立した。その後、内陸に進出し広大な水田地帯をも支配するようになり、次第に漁業・農業ともに生産性を高め､新田の開拓などに力を入れて、経済力・政治力・軍事力を拡張し、文字通り尾張国の支配者となった。尾張氏は后妃を入れてヤマト朝廷と外戚関係を結び､朝廷の要職に人材を送り込むと共に、本拠地はヤマト朝廷の東日本平定のための司令部あるいは前線基地となった。

尾張紀行をまず春日井市の味美古墳群を訪れるところから始めた。ここの南側、名古屋市との境には庄内川が流れており、水運に便利の良い地である。この地には、かつて多数の古墳が存在したとされているが、そのほとんどは滅失しており、二子山古墳、白山神社古墳、春日山古墳、御旅所古墳の４基が現存するだけである。これらが味美古墳群を形成しており、現在は二子山古墳公園として整備されている。味美二子山古墳は後で訪れる断夫山古墳と同時期の５世紀末～６世紀初建造の前方後円墳である。この二つの古墳は今城塚古墳(継体陵・高槻市)と墳丘規格が同じであり、二子山は約五割、断夫山は約八割の規模に相当することから､被葬者に何らかの繋がりがあったのではないかと考えられている。二子山の発掘調査の結果出土した大量の埴輪や土器は、解説パネルつきで公園の中心にある円墳形「ハニワの館」に展示されている。

●写真１：味美二子山古墳

公園内には他に白山神社古墳（前方後円墳）と御旅所古墳（円墳）がある。白山神社古墳は頂上に神社が建つており、この古墳は可美真手命（物部氏の祖）又はその子の味饒田命（うましにぎたのみこと）の墓と伝えられている。白山神社の祭神は伊弉諾命、伊弉冉命、菊理比売命、可美真手命などであり、御旅所古墳は祭事に使われる特別な場所である。

遠からぬところに、味鋺神社（あじまじんじゃ）がある。延喜式神名帳に収載の古社で、創建の時期は不明だが、境内の案内によると、当地に進出した物部氏族が祖先を祀り、平和と繁栄を祈ったことに始まると記されている。神社名は可美真手命（または宇摩志摩治命）の御名に因んでいる。

●写真２：
愛知県指定史跡石碑
白山神社[上]
御旅所古墳[左]

●写真３：味鋺神社

●写真４：尾張大國霊神社

更に北に足を伸ばし、尾張大国霊神社を訪れた。尾張の地祇（くにたまのかみ）を祀る総鎮守で、国史が祭祀を執り行うところから、国府宮と云う通称でも知られている。建物の配置は本殿・渡殿・祭文殿・東西の回廊・拝殿・楼門が横一線に立ち並んでおり、尾張式と呼ばれている。

その日は木曽川を越え、岐阜羽島の宿に泊まり、翌朝は再び尾張国を横断ドライブして、熱田神宮とその摂社を参拝、周辺の古墳史跡を訪問した。

熱田神宮は樟の巨木をふくむ広葉樹の多い神苑「熱田の杜」に鎮座している。祭神は熱田大神（草薙神剣を御霊代とする天照大神）である。この剣は素戔嗚尊が八岐大蛇を退治した際に、尻尾からとり出した天叢雲剣で、日本武尊が焼津で焼き打ちに遭った際に、この剣で草を薙いで窮地を脱することができたことから、草薙剣と呼ばれるようになった。神宮の相殿神としては天照大神、素戔嗚尊、日本武尊、宮簀媛命、建稲種命が祀られている。宮簀媛命は日本武尊の妃であり、尊より草薙神剣を預けられていた。社殿は明治の中頃までは尾張造りであったが、そののち伊勢神宮とほぼ同規模の神明造りに改造されたという。但し、拝殿から見えるのは屋根の千木・勝男木だけである。参道で異彩を放っているものに、織田信長が桶狭間の戦勝のお礼に奉納したという土塀と大楠がある。

●写真５：熱田神宮本殿（正面右から）

●写真６：高座結御子神社

●写真７：断夫山古墳

正門鳥居の西側に摂社、別宮八剣宮（祭神は剣、武家が崇敬）、上知我麻神社（祭神は乎止與命、尾張氏の祖神・天火明命の１１世の孫、宮簀媛命、建稲種命の父）がある。域外の摂社として、神宮の北約８００ｍに高倉結御子神社があり、摂社だが名神大社格の式内社である。祭神は高倉下命（火明命の子、天香山命、越後にも座して弥彦神）で、子育ての神として信仰され、幼児の成育と虫封じを祈願する子預祭が有名である。

神宮の北側の公園には尾張最大の前方後円墳・断夫山古墳がある。全長１５１ｍ、前方部幅１１２ｍ、後円部径８０ｍ、高さ１６ｍで、この古墳は高槻市の継体天皇陵と同一の規格でサイズが８０％であり、被葬者について諸説があるが、尾張連草香との説が有力である。我々は晩秋に訪れたので、古墳上の樹木の見事な黄葉を見ることができた。往事、伊勢湾海岸は断夫山古墳の直下の南にまで迫っていた。東海道「宮の渡し」（桑名まで七里）の乗り場も南に向かう掘り割りの畔にあり、今では石碑を残すのみとなっている。

●写真８：断夫山古墳の黄葉

写真をご提供頂いた吉本吉彦氏に感謝申し上げます。

（岡野　実）